

# カイコに学ぶ

秋山 幸也

※相模原市立博物館学芸員



その15 **最終回**

カイコと人間

命について考える教材



## 1 キライ！からカワイイ！へ

ある学校の3年生のクラスで、カイコを飼うことになりました。担任の先生がクラス全員に向かって「虫がキライ！っていう人いるかな？」と質問します。すると、クラスの半分近くが手をあげました。これからカイコを飼うのに大丈夫かな？先生はちょっと不安になりました。

ところが、実際にカイコが卵から産まれて、クワの葉にとりつく様子、小さいながらにモリモリとクワの葉を食べて、日に日に大きくなっていく姿。3週間ほどの間、クラス全員でがんばってクワの葉を与えて育てているうちに、初めはこわごわと扱っていた人も、だんだんとカイコを見つめる目がキラキラと輝いていきました。

カイコが5歳まで育ててきたころ、先生はもういちどクラスで質問しました。「虫がキライな人、手を挙げて」すると、ちょっと迷いながら、やっぱり半分近くが手をあげました。先生が続けます。「それじゃあ、かいこはカワイイって思う人！」すると、全員が元気よく手をあげました。



## 2 知ること好きになる

クラスでカイコを育ててみると、もともと虫が好きな人はカイコの専門家のようにになります。そして、それ以外、つまり虫は好きでも嫌いでもない、あるいは虫は嫌いという人たちも、ほとんどが「カイコなら好き」となります。これは、卵からかえってすぐ、自分が与える食べ物によって成長し、そのようすをつぶさに観察することで芽生える感情です。知ること好きになるという体験は、とても大切なことです。

カイコを育てながら抱く愛情が日に日に大きくなる一方で、カイコの飼育には避けられない“終わり”が待っています。その終わりにどう向き合うかによって、カイコを飼って良かったと考えられるかが決まります。

### 3 命に向き合う

この連載の最初の方（No.2）でも紹介しましたが、カイコを育てるということは、農業です。繭の収穫が目的ですから、繭を作ったところで乾燥、あるいは冷凍して中の蛹を殺してしまうこととなります。クラスでここまで大切に育ててきたカイコの命を止めてしまうということにしっかり向き合って納得するには、カイコを飼うことが農業であるということを理解する必要があります。

さらに、繭をどう利用するか、そして成虫の観察のために、いくつかの繭を乾燥させずに残すか、成虫が生まれて卵を産んだらそれをどうするか…、一つ一つしっかり考えなくてはなりません。

そんなことをクラスで真剣に話し合った結果、クラスの中で生きものの命について真剣に考えられるようになった、そしてカイコを飼ってからクラスの雰囲気が優しくなった。そんな声を担任の先生から伺ったことがあります。

カイコの成長を見つめた約1か月という期間は、成長に関する心配ごとや、クワの葉をとる苦労などあってとても大変です。それでも、命と向き合うとても大切な時間になることは間違いありません。人間が何千年も命をつないできたカイコという生きものは、すでに人間にとってもかけがえのない存在となっています。これからも多くの方がカイコをとおして命や農業について考えてほしいと思います。

